風雅集佛

六武

五終

雪農巻

芭蕉翁

米買に雪の俤や投扇巾

千鳥に蓍ふ川添の町　雪川

入もを撰るもてに舩迄て　清秋

たひなしころも衿る胸紋　易難

月乃松栗鼠ゑけ巴は新ほし　翠如

相阿彌まわ新の岩組　暁堂

たゝのひの渓々に落る秋を賦せ　川

肘も白へせ伽羅乃脇息　秋

紙燭と乾蚊もおもひよう焼迯　難

留まも扨毎に門乃五月雨　如

上下と醍醐惑ハたたつる者　臺

寺の畠乃百ゝ菜しれ　川

〻ひ須の蕃て食る笹乃漬　秋

鞠小弓好く春の宮附　難

法華の嶽より分ていく石訴　如

月城庵千沙弟〻に渉　臺

雨風より花の役人名れゝ　川

ちと藁藉（子コ夕）たきうへは沓　秋

ゆゝく贄（ニユ）乃形代〻ち沈め　臺

糠星さえ〻遥乃なれ宮　如

る樓に人待祢乃袖乃帳　難

抗らせ乾湯ゆゝ乃汙　川

香盒有摺(コテ)まて銭を乞ふこ　秋
船乃漳子社鴻のはけたて　難
秋を知る笛乃志めりも蕎の穂　川
萩咲ふ〻てゝ名残ある人　蕉
拳を歩馬の曹ゝ月照て　如
首わゝさ南〻京乃桟敷　秋
ぬ〻や誰扶るはへ〻綾藺笠　難
荷物をなけて蠅も居ぬ船　如

飈〻て矢田乃砂原ふくもを　蕉
撞の溶乃　尤年歸　川
かけなしぬ眼鏡ちいさく鼻奪に　如
ゝ家も乞兒も三千の弟子　難
花枯て卯束胥の関ゝつ庭　秋
浪ゝもとゝ仏法をとくむ　蕉

小松川の巻

歌仙行　芭蕉翁

秋ふかふかてりそや赤ハ小松川　曉臺

むらくと引ル風の書菊　朝四

朝の月既ぬ白ひくもるそ　全

才〻ハ木綿なり〻紫　臺

壽ハ十のさうつき引まハる　全

鴨足みなちゝ素の底庭

大旦那寺の願ゐ剃つけて　四

瞬き二重乃らちらけの副　月成

扇とつて離ぶ乃かなて健氣也　臺

まちとともせぬ浪乃扶すう　四

鈍乃なさん怪うとおりふ月の色　成

いのち嬉しく素直く来し　臺

格形のおんやゐならふとは　四

衣も烟ゐもゐ保ひらちん　成

石はしは紙屋川迫乃かけ籠　臺

謎の師匠　瓜奴ハちし　四

祢せておけ茶のゐとなる欲倒し　成

弓うつせく雑ゐを祢ひふ　臺

解らて淡雪の雪の一烟と　四

節和しうに紀吉乃詠　仝

青乃ちち茶めし好宮のおやんと魚　仝

嫁も古風の赤ゐなるハし　成

村辺や年ふるなる乃呉服和　全

いけしお場の名静こ　全

百姓の田曲ふたふ松の蔭　巷

願ハぬ後世も笑てらかるん　全

影とう鍛冶の糸利鎧の　成

しかぬ神を秋ま絵ふ　全

月細く世を刀の鞘ま影添て　四

額乃文字を半て入る　腰　笑

建長寺ふの回りもあ入う　成

あふ若しやと胡椒たつまる　四

濡　衣のたちまちふる板の冴　巷

うせきやこぬ馬を引き　全

江戸ハ花ハ里の田代し家つき　四

宇ふの節の風中を吹風　執筆

右

清徳林與刊

牛酔日之巻

芭蕉翁

酒売たゝ家 尊あ事　曉堂

池ゑのゝ鯉の瀬おゝて　文英

淪にまふ鶴ひ雲ひとつ　仝

ゑまり車のやゝ傾くゝ人　基

沸芽ゝ煙ゝ門平家子　仝

赤穂出て世を木うれの美乃秋　美

ふも忘れし袖の絞ひ　仝

審の月ハまらせぬもよ浪みて　蕉

風ゆみ〳〵ゆ翠篭の掛香　仝

拳鞠に鼻ちりよせ切ぶん　魚

波〳〵こゝ〳〵まゝ蕾ぬなり　仝

イりと雪の山色乃塔ひとり　蕉

詠なりゝ〳〵ゆ親たつゆ　仝

也〳〵半軍乃沙汰も強りて　魚

麻蒔つけ〳〵高上一郡　蕉

月花ハあこやとゝん松いけ　魚

年さ〳〵ぬ〳〵ゆ乃の師を　仝

累許〳〵澤菴禅師とゝ　蕉

濃き袋乃丸所巾縫ひ　仝

志のふへきあゝを思ひ兩袋　魚

猪よゝへせを追うゝゆ拳　仝

大鋸（ダイキリ）をゝしろまゝ負ゝ夜男　蕉

黄金ゝ降とゝ清霊屋　全

さゝつきをそつと注へゝ子漱川　魚

よゝいゝゝるゝいゝゝ孤も泳ぎ　全

人志ゝて舞樂の家をゝかりよく　素

柳筍の西に芋をつくゝて　全

ゝゝもに拍たゝゝぬ月清き　魚

姫の扇をひゝく神為　全

従わらハ蛇を拯んて死志きり　素

一旦ゝの朱を卒おゝ　全

しろくゝ空見ゆる仮屋の相印　魚

風も南ゝゝもゝ出ん元　全

心媚て転ちくゝの花ゝ家　素

うゝひゝに志ゝを踊ゝり

執筆

田毎月

元日や田毎の月を見しらせ　芭蕉翁

よき歌うしの茂のあるゝ家　曉臺

雪農も名ゝ朝の冬汲て　月村

けゝの〳〵腸あれ色の〳〵蚊　五梁

おくそこもなき夜乃月の相撲　阿梁

酒下一つまき柚をたちくる　暮青

小手神子義うち志め釣小舟　鱗甲
新くきやうす光て市ゝたひ　秋之
ところくと上りたちうち茶一行　李明
逮夜乃会佛息はくくけ　梁賀
そよさゝに總も黒紅の塗盃　月
夕月楊乃孫子宮義　五
うくせらいの光なる毛向井　秋
雨ゝまり月乃入かる　鱗

鬼よりも之とせの酒乃買かを　當
鉛刀鉛と　李
せし鞆子つとむる弦組千騎　何
紙片はとこを素乃つゝ時　賀
先乃世きも宋子寺の通板　五
ゝに班鳩乃伴所乃礎　月
はしゝ巻を少てりは拙お屋　秋
消息すまゝ蕎茶おません　何

すすきは手汗一雫なつかしむ　李

涉妻舟乃夏柳かけ　菅

志ほゝしゝ拍手崇りの古祠　賀

地論乃果子粥啜るなり　鐵

瓜畑子絡あつひを忘れう　五

望月の入境乃皆雇ひ人　李

うきうき新月子むす村烏　月

秋しゝと新の市庭業内　秋

子孫乃八幡白き、ゝ　阿

九めゝ拵る麻乃うるかる　鐵

故々のたゝ赤ゝも波越て　賀

鐵とゝる者も鶯の人なる　菅

百年乃梢ゝ子孫忘れも　月

嘶ゝつ新世ゝ乃時り　筆

右

阿梁亭興行

加什法の巻

景清も哀れの庭ニハちるホ　芭蕉翁

鳥ヶ扇乃風情春風　曉臺

川幅のたゝい子岩や蛩人　曾嵐

二階位居乃旅疎なり　仝

蒸かゝれる月代の柚の黄ミ　臺

空巣ヶ蜂のゐるる秋　仝

板橋自子山の門裏乃うてをき　嵐
墨を金乃もゝ　昊ゝ　掛羅　全
情ある人子笑ふて別れ　雪
をれなてしこを乃ぞまゝ　全
岩本の神ゝ枕や急ぐ人　全
僧をおゝしてて罷ハ却ハ　全
破法子指といやふる袖の月　全
これハ法ゝ庭下法の寒　嵐

摘淄てゝつ法ゝ扇をひゝもめ　全
ゝま世淄ゝ名ゝ　源遁　全
拙数寿ゝ紙衣の目ゝ衣なり　全
志ゝまゝ子ゝ新　重の蛸の毋　全
柳濃波阜て解笑ふ舟ゝめて　雪
治郎抱へし　えせ者ゝ春　全
湿喫子之月蛸子ゝ　全
筆り押金ふ坊乃扶ゝ　嵐

風ふくちからの強く滝の音　宵
化されて居る如く一幾景　仝
国主ふ〳〵罷なる世の為に　春
絲淳ふ〳〵蛇懼れなり　仝
ふおちの瓢をふ〳〵なる雨の後　仝
拍だく〳〵さん藪入り新屋　宵
塀の自階子あるなる契して　仝
刻てもをなる撞のおろなる　仝

生ぬふ〳〵石ふ鑒ふ紹百字　春
留まるの社頃をはゞ林〳〵ま　宵
ふけ浪ふぬれふ裾を火ふおけて　春
人ぬ舞をふ風ふとふ〳〵ふ　仝
いや自ふ百年来の塚の花　宵
蝶ふ〳〵と華ふふも美　筑峯

四時之吟

雪川

畔ぬるやかぶ屋

うけ　屋乃連

川風や烏帽子志げるる

簑さらへ

二之度ぶ笑試尺るるる秋の

抜ハ

ささ尚しを簑の後乃

を抜ゐ

迷くも見ハおらぬ田螺哉　朝四

夜なうた寂しさいうたかんことり

たよくしかしの方ハ歩うり年

鄙も歩く歩てハ見ぬ月抜き

城あとゝおくかゝくく農蛙の那　月成

さけ帯乃夏夜ゝ風情ゝ

起ふしも考稲よさや井の底

餅稲や汾多をゝろ乃寒寒

森猪多や祢はんの像も花のかゝ　翠如

祇園會やこしを都乃裁（キレ）　鑑（カミ）

たゝしゝなる紙命を足ゝわるゝ（なるようあれのかぶしるべき）

かとゝや忘日ゝ歩ゝ雪の門

○

船うきんと柳をつゝむ涼ゝの那　五梁

新見えて昭芳もさひし月の蘇

連や苑のあゝり居ゆゝ　箱　暮青

月落て素のさゝ川さゆる　難甲

郭公めでゝ松乃匂ひ小　秋之

秋の西の空乃灯かゞ生々初

梅咲や故乃舞子来へまし　秋之

松苗を免ゝ立ち出る露小

夕汐やあゝりの梅乃匂ひ越　李明

室の亀西子深して秋たちぬ

磐を越て遠山桜ちきんとり　梁賀

ゝちゝへば浪の間ゝ秋の風

岸やかたくともおぶしか箒　阿梁

むゝ露や汐ふまふかゝ長

○

袖ぬ乃雪ゝあに菜摘ゝ初　文魚

むゝ女はゝかゝ伯ゝかきつゝ

ゝ雲子萩垣かゝ月ゝ

素満る（焼色）杖ゝ（クヌキ）樟の香ひ小

おちゝ紅葉と小僧を花の留ち　曾嵐

かとうなる鬼一口に両抜このれ
義の森かくれなく乱れ
東北乃浪人嘆かるる月

○

波の雛小乃ふち波さうなる　易難

○

夢田乃ゆきやふれて宇治の夢小　岷江
紅緋もくちて網代ゆ蕭蕭れ

一斉き雲ホなんとく梨おやとる
まる毎のちうらうれなきぬうら　山泉居　嘯石

みちう扶の森くう曽再ゆ多鶴小　生山
いま蕊る花とき乃えぬ　樓の舎

○

とんみうと撞もちつむや　掩月　武蔵西友慈亦　琴詩
いはくへ森ぬ扶乃連や　杜鶴
嗚呼夜なり扉戸をくく月の雲

世　鳥のねかをのがしうぶ

梅咲や志ほり歩けば酒の香　春塘

かとゝぎすたちまちかの匂ひうれ

小夜啼月の嶺ゝつ谷音この声

ぬくもれをとまりやゆゝしき年の山

梅よ雪　女ゆゝしき新月ぶり　仙子

もろこしや日を遮ぶる梅の蝉

秋の境ゝも色ゝ蟬法師

寒月や雲ぶるぶる雲ぶる

客中

春雨ぶるぶる秋入松の色ぶる　子厚改　士昂

呼墓の腮ず赤き日さゝ哉

人寒し芒ぶる岩ぶる月夜

おゝ出と雲はむ中ぶる横車

をみるゝ〜笠のうたてり地の日ぬく　浙江

ゑたやゝ枝葉ふまへて鳴雲雀　吟江

茂木の葉山ハゆめへの雨足ゆる　彫門

野徑

かんこどり呼やもるさ地るもあゝも　曉臺

書林

江戸室町三丁目
京寺町松原上　須原屋市兵衛
辻井吉右衛門